

## 2 三十年戦争と西欧国際体制の成立

### 1) 三十年戦争

#### 三十年戦争前のドイツ

「ウェストファリア条約後の神聖ローマ帝国」 菊池良生『図説神聖ローマ帝国』河出書房新社、2009年 71  
ページ

#### 神聖ローマ帝国

300 余りの領邦と帝国都市の連合体

皇帝 聖俗 7 人選帝侯によって選出されるが、事実上ハプスブルク家が世襲  
選帝侯には大幅な特権が付与されており、帝国内での国家化の傾向

宗教改革の衝撃 多様な階層、人々に影響

1522-23 騎士戦争

1524-25 農民戦争

→ドイツの宗教改革、領邦諸侯によって主導される

ルター派の諸侯 領邦教会確立

1546-47 シュマルカルデン戦争

皇帝側の勝利；強硬な諸政策→カトリック諸侯の反発

1555 「アウクスブルク宗教平和令」

領邦諸侯、宗教の裁定権を獲得→領邦の国家化

#### 三十年戦争の展開

① ベーメン・プファルツ戦争（1618-1623 年）

1618 プラハの窓外放出事件

「ハプスブルク家略系図」

長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之『世界の歴史 17 ヨーロッパ近世の開花』中  
央公論社、1997年 p.136

→ ベーメンの反乱

フェルディナンド2世の廃位を宣言

プファルツ選帝侯フリードリヒ5世をベーメン王に選出

皇帝軍の勝利と過酷な報復措置

皇帝の権力拡大、スペイン・ハプスブルクとの提携は諸侯に衝撃を与えると同時に  
周辺諸国の介入を招く

## ② デンマーク戦争（1625-29 年）

フランス

デンマーク イギリス、オランダの援助のもと、プロテスタントの擁護を掲げて  
北ドイツに侵入

→ 皇帝軍の勝利

1629 「復旧勅令」

↑

↓

1630 選帝侯会議

## ③ スウェーデン戦争（1630-35 年）

参戦理由

グスタフ・アドルフ ルター派  
バルト海域への脅威

フランスの援助

スウェーデンの軍事的優位 スウェーデン方式

プロテスタント諸侯合流

↓

グスタフ・アドルフの戦死

スペインと連携した皇帝軍の優位

→ 諸侯 個別の同盟締結権を剥奪される

フランスの介入

## ④ フランス・スウェーデン戦争（1635-48 年）

### 三十年戦争の対立軸

宗教的対立

皇帝と諸侯の権限をめぐる対立

フランス/スウェーデンとハプスブルク帝国の国益をめぐる対立

### ウェストファリア条約

① 「アウクスブルク宗教平和令」の再確認

カルヴァン派

② スウェーデン 北ドイツのポンメルンその他の領土を獲得

フランス アルザスとロレーヌの一部を獲得

③ 領邦 主権と外交権を獲得

cf. 皇帝

→領邦の国家化

領邦が主権と外交権を獲得する条件：皇帝と帝国に敵対しない。

領邦君主 選帝侯、公、伯という身分差が意味を持ち続ける。

帝国 その後も 150 年にわたって存続

諸領邦が平和的に共存するための大枠として機能

フランスやオスマン帝国の侵攻に対して集団的な防衛力を発揮